

水仙月の四日

宮沢賢治

青空文庫

雪婆ゆきばんごは、遠くへ出かけて居おりました。

猫ねこのような耳をもち、ぼやぼやした灰いろの髪かみをした雪婆んごは、西の山脈の、ちぢれたぎらぎらの雲を越こえて、遠くへでかけていたのです。

ひとりの子供が、赤い毛布けつとにくるまって、しきりにカリメラのことを考えながら、大きな象の頭のかたちをした、雪丘ゆきおかの裾すそを、せかせかうちの方へ急いで居りました。

(そら、新聞紙しんぶんがみを尖とがったかたちに巻いて、ふうふうと吹ふくと、炭からまるで青火が燃える。ぼくはカリメラ鍋なべに赤砂糖を一つまみ入れて、それからザラメを一つまみ入れる。水をたして、あと

はくつくつくつと煮るんだ。〜ほんとうにもう一生けん命、こどもはカリメラのことを考えながらうちの方へ急いでいました。

お日さまは、空のずうつと遠くのすきとおったつめたいとこで、まばゆい白い火を、どしどしお焚きなさいます。

その光はまっすぐに四方に発射し、下の方に落ちて来ては、ひっそりした台地の雪を、いちめんまばゆい雪花石膏の板にしませんでした。

二疋の雪狼ひきゆきおいのが、べろべろまつ赤な舌を吐きながら、象の頭のかたちをした、雪丘の上の方をあるいていました。こいつらは人の眼には見えないのですが、一ぺん風に狂い出すと、台地のはずれの雪の上から、すぐばやばやの雪雲をふんで、空をかけまわ

りもするのです。

「しゅ、あんまり行つていけないいたら。」雪狼のうしろから白しろくま
熊の毛皮の三角帽子ぼうしをあみだにかぶり、顔を苹果りんごのようにかが
やかしながら、雪童子ゆきわらわすがゆつくり歩いて来ました。

雪狼どもは頭をふつてくるりとまわり、またまつ赤な舌を吐いて走りました。

「カシオピイア、

もう水仙が咲き出すぞ

おまえのガラスの水みずぐるま車

きつきとまわせ。」

雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星さけに叫びました。そ

の空からは青びかりが波になつてわくわくと降り、雪狼どもは、
ずうつと遠くで焰ほのおのように赤い舌をべろべろ吐いています。

「しゆ、戻もどれたら、しゆ、」雪童子がはねあがるようにして叱しか
りましたら、いままで雪にくつきり落ちていた雪童子の影法師かげぼうし
は、ぎらつと白いひかりに変わり、狼おいのどもは耳をたてて一さんに戻もど
つてきました。

「アンドロメダ、

あぜみの花がもう咲くぞ、

おまえのラムプのアルコホル、

しゆうしゆと噴ふかせ。」

雪童子ゆきわらすは、風のように象の形の丘おかにのぼりました。雪には風

で介殼かいがらのようなかたがつき、その頂いただきには、一本の大きな栗くりの木が、美しい黄金きんいろのやどりぎのまりをつけて立っていました。

「とつといで。」雪童子が丘をのぼりながら云いいますと、一疋の雪ゆき狼おいのは、主人の小さな歯のちらつと光るのを見るや、ごむまりのようにいきなり木にはねあがつて、その赤い実のついた小さな枝えだを、がちがち噛かじりました。木の上でしきりに頸くびをまげている雪狼の影法師は、大きく長く丘の雪に落ち、枝はどうとう青い皮と、黄いろの心しんとをちぎられて、いまのぼつてきたばかりの雪童子の足もとに落ちました。

「ありがとうございます。」雪童子はそれをひろいながら、白と藍あゐいろの野はらにたっている、美しい町をはるかにながめました。川がきら

きら光つて、停車場からは白い煙けむりもあがっていました。雪童子は眼を丘のふもとに落しました。その山裾の細い雪みちを、さつきあかけつとの赤毛布を着た子供が、一しんに山のうちの方へ急いでいるのでした。

「あいつは昨日きのう、木炭すみのそりを押して行った。砂糖を買つて、じぶんだけ帰つてきたな。」雪童子はわらいながら、手にもつていたやどりぎの枝を、ぷいっとこどもになげつけました。枝はまるで弾丸たまのようにまっすぐに飛んで行って、たしかに子供の目の前に落ちました。

子供はびつくりして枝をひろつて、きよろきよろあちこちを見まわしています。雪童子はわらつて革かわむちを一つひゆうと鳴らし

ました。

すると、雲もなく研みがきあげられたような群ぐんじよう 青あおの空から、ま
つ白な雪が、さぎの毛のように、いちめん落ちてきました。そ
れは下の平原の雪や、ビール色の日光、茶いろのひのきでできあ
がった、しずかな奇きれ麗な日曜日にちようびを、一そう美しくしたのです。

子どもは、やどりぎの枝をもつて、一生けん命にあるきだしま
した。

けれども、その立派な雪が落ち切ってしまったところから、お日
さまはなんだか空の遠くの方へお移りになって、そこのお旅屋で、
あのまばゆい白い火を、あたらしくお焚きなされているようだし
た。

そして西北にしきたの方からは、少し風が吹いてきました。

もうよほど、それも冷たくなってきたのです。東の遠くの海の方では、空の仕掛しかけを外はずしたような、ちいさなカタツという音が聞え、いつかまつしろな鏡に変わってしまったお日さまの面めんを、なにかちいさなものがどンドンよこ切つて行くようです。

雪童子は革むちをわきの下にはさみ、堅かたく腕うでを組み、唇くちびるを結んで、その風の吹いて来る方をじつと見ていました。狼どもも、まっすぐに首をのばして、しきりにそつちを望みました。

風はだんだん強くなり、足もとの雪は、さらさらさらさらうしろへ流れ、間もなく向うの山脈の頂に、ぱつと白いけむりのようなものが立ったとおもうと、もう西の方は、すっかり灰いろに暗

くなりました。

雪童子の眼は、鋭く燃えるように光りました。そらはすっかり白くなり、風はまるで引き裂くよう、早くも乾いたこまかな雪がやつて来ました。そこらはまるで灰いろの雪でいっぱいです。雪だか雲だかもわからないのです。

丘の稜は、もうあつちもこつちも、みんな一度に、軋るよう切るように鳴り出しました。地平線も町も、みんな暗い烟の向うになつてしまい、雪童子の白い影ばかり、ぼんやりまつすぐに立っています。

その裂くような吼えるような風の音の中から、

「ひゆう、なにをぐずぐずしているの。さあ降らすんだよ。降ら

すんだよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆひゆう、降らすんだよ、飛ばすんだよ、なにをぐずぐずしているの。こんなに急がしいのにさ。ひゆう、ひゆう、向うからさえわざと三人連れてきたじやないか。さあ、降らすんだよ。ひゆう。」あやしい声がきこえてきました。

雪童子はまるで電気にかかったように飛びたちました。雪婆んごがやってきたのです。

ぱちつ、雪童子の革むちが鳴りました。狼おいのどもは一ぺんにはねあがりました。雪わらすは顔いろも青ざめ、唇くちびるも結ばれ、帽子も飛んでしまいました。

「ひゆう、ひゆう、さあしつかりやるんだよ。なまけちやいけな

いよ。ひゆう、ひゆう。さあしつかりやつてお呉れ。今日はこころは水仙月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゆう。」

雪婆んごの、ぼやぼやつめたい白髪は、雪と風とのなかで渦になりしました。どんだんかける黒雲の間から、その尖った耳と、ぎらぎら光る黄金の眼も見えます。

西の方の野原から連れて来られた三人の雪童子も、みんな顔いろに血の気もなく、きちつと唇を噛んで、お互挨拶さえも交わさずに、もうつづけざませわしく革むちを鳴らし行ったり来たりしました。もうどこが丘だか雪けむりだか空だかさえもわからなかったのです。聞えるものは雪婆んごのあちこち行ったり来たりして叫ぶ声、お互の革鞭の音、それからいまは雪の中をかけあ

るく九疋くひきの雪狼どもの息の音ばかり、そのなかから雪童子ゆきわらすはふと、風にけされて泣いているさつきの子供の声をききました。

雪童子の瞳ひとみはちよつとおかしく燃えましました。しばらくたちどまつて考えていましたがいきなり烈はげしく鞭をふつてそつちへ走つたのです。

けれどもそれは方角がちがつていたらしく雪童子はずうつと南の方の黒い松山にぶつかりました。雪童子は革むちをわきにはさんで耳をすましました。

「ひゆう、ひゆう、なまけちや承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゆう。今日は水仙月の四日だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆうひゆう。」

そんなはげしい風や雪の声の間からすきとおるような泣声がち
らつとまた聞えてきました。雪童子はまっすぐにそつちへかけて
行きました。雪婆とうげんごのふりみだした髪が、その顔に気みわるく
さわりました。峠とうげの雪の中に、赤い毛布けつとをかぶったさつきの子が、
風にかこまれて、もう足を雪から抜ぬけなくなつてよろよろ倒たおれ、
雪に手をついて、起きあがろうとして泣いていたのです。

「毛布をかぶつて、うつ向けになつておいで。毛布をかぶつて、
うつむけになつておいで。ひゆう。」雪童子は走りながら叫びま
した。けれどもそれは子どもにはただ風の声ときこえ、そのかた
ちは眼に見えなかつたのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゆう。動いちやいけない。じきや

むからけつとをかぶつて倒れておいで。「雪わらすはかけ戻り^{もと}ながら又^{また}叫びました。子どもはやっぱり起きあがろうとしてもがいていました。

「倒れておいで、ひゆう、だまつてうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くないんだから凍^こえやしない。」

雪童子は、も一ど走り抜けながら叫びました。子どもは口をびくびくまげて泣きながらまた起きあがろうとしました。

「倒れているんだよ。だめだねえ。」雪童子は向うからわざとひどくつきあたつて子どもを倒しました。

「ひゆう、もつとしつかりやつておくれ、なまけちやいけない。

さあ、ひゆう」

雪婆んごがやってきました。その裂けたように紫むらさきな口も尖った
齒もぼんやり見えました。

「おや、おかしな子がいるね、そうそう、こつちへとつておしま
い。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたつていいんだよ。」
「ええ、そうです。さあ、死んでしまえ。」雪童子はわざとひど
くぶつつかりながらまたそつと云いました。

「倒れているんだよ。動いちやいけない。動いちやいけないつた
ら。」
狼おいのどもが気ちがいのようにかけめぐり、黒い足は雪雲の間から
ちらちらしました。

「そうそう、それでいいよ。さあ、降らしておくれ。なまけちや

承知しないよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」雪婆んごは、また向うへ飛んで行きました。

子供はまた起きあがろうとしました。雪童子ゆきわらすは笑いながら、も一度ひどくつきあたりました。もうそのころは、ぼんやり暗くなつて、まだ三時にもならないに、日が暮くれるように思われたのです。こどもは力もつきて、もう起きあがろうとしませんでした。雪童子は笑いながら、手をのばして、その赤い毛布けつとを上からすっかりかけてやりました。

「そうして睡ねむつておいで。布団ふとんをたくさんかけてあげるから。そうすれば凍えないんだよ。あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで。」

雪わらすは同じとこを何べんもかけて、雪をたくさんこどもの上にかぶせました。まもなく赤い毛布も見えなくなり、あたりとの高さも同じになってしまいました。

「あのこどもは、ぼくのやったやどりぎをもっていた。」雪童子はつぶやいて、ちよつと泣くようにしました。

「さあ、しつかり、今日は夜の二時までやすみなしだよ。ここらは水すいせんづき仙月の四日なんだから、やすんじやいけない。さあ、降らしておくれ。ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」

雪婆んごはまた遠くの風の中で叫さけびました。

そして、風と雪と、ぼさぼさの灰のような雲のなかで、ほんとうに日は暮れ雪は夜じゆう降って降って降ったのです。やつと夜

明けに近いころ、雪婆んごはも一度、南から北へまっすぐに馳はせながら云いいました。

「さあ、もうそろそろやすんでいいよ。あたしはこれからまた海の方へ行くからね、だれもついて来ないでいいよ。ゆつくりやすすんでこの次の仕度したくをして置いておくれ。あまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで。」

その眼は闇やみのなかでおかしく青く光り、ばさばさの髪かみを渦巻かせ口をびくびくしながら、東の方へかけて行きました。

野はらも丘おかもほっとしたようになつて、雪は青じろくひかりました。空もいつかすつかり霽はれて、桔梗ききよういろの天球には、いちめんの星座がまたたきました。

雪童子らは、めいめい自分の狼おいのをつれて、はじめてお互挨拶しました。

「ずいぶんひどかったね。」

「ああ、」

「こんどはいつ会うだろう。」

「いつだろうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらいのもんだろう。」

「早くいつしよに北へ帰りたいね。」

「ああ。」

「さつきこどもがひとり死んだな。」

「大丈夫だいじょうぶだよ。眠ってるんだ。あしたあすこへぼくしるしをつ

けておくから。」

「ああ、もう帰ろう。夜明けまでに向うへ行かなくちや。」

「まあいいだろう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペーアの三つ星だろう。みんな青い火なんだろう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだろう。」

「それはね、電気菓子とおなじだよ。そら、ぐるぐるぐるまわっているだろう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいいんだよ。」

「ああ。」

「じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

三人の雪童子は、九疋くひきの雪狼ゆきおいのをつれて、西の方へ帰って行きました。

まもなく東のそらが黄ばらのように光り、琥珀こはくいろにかがやき、黄金きんに燃えだしました。丘も野原もあたらしい雪でいっぱいです。雪狼どもはつかれてぐったり座すわっています。雪童子も雪に座つてわらいました。その頬ほおは林檎りんごのよう、その息は百合ゆりのようにかおりました。

ギラギラのお日さまがお登りになりました。今朝けさは青味がかって一そう立派です。日光は桃ももいろにいっぱいに流れました。雪狼は起きあがって大きく口をあき、その口からは青い焰ほのおがゆらゆらと燃えましました。

「さあ、おまえたちはぼくについておいで。夜があけたから、あの子どもを起さなけあいけない。」

雪童子は走って、あの昨日きのうの子供の埋うずまっているところへ行きました。

「さあ、ここらの雪をちらしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれをけむりのように飛ばしました。

かんじきをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやってきました。

「もういいよ。」雪童子は子供の赤い毛布けつとのはじが、ちらつと雪から出たのをみて叫びました。

「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすはうしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたようでした。そして毛皮の人は一生けん命走ってきました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部

・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水仙月の四日

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>